

◎今週の御言葉「万物の創造者」（創世記 2 章 4 節～25 節、ヨハネの黙示録 4 章 1～11 節）

「神は第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。」(2:3) 「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」(4:11)

◎私たちが森羅万象を見ると、人間のすべての叡智を持ってしても計り知れない神秘なことが多々あります。その創造者とは誰でしょうか？

◎創世記 2 章 4 節は天地創造(1:1—2:4)の結語になっていると同時に人間の創造(2:1—25)の緒言になっており、特に6 日目の人間の創造(1:26—30)に焦点を合わせているのです。

◎人は土のちりで形造られ、その鼻に「いのちの息」を吹き込まれ、「生き物」となった(7)。即ち、他の生き物とは違って神に似るように神のかたちに特別に造られたのです。神様は「エデン(水の豊かに潤った所)の園」(15,3:23,24,エゼキエル36:35,ヨエル2:3)に人が住むようにされ、園の中央には「いのちの木」と「善悪の知識の木」があったのです(9)。

◎神様は善悪の知識の木からだけはその実を取って食べないようにと仰せられた。それは生死に関わることであったのです(16—17)。人は神の御声に聞き従うことにより善悪の知識を得ることが出来るのです。しかし、神の御声に従わず、この木の実を食べるということは、人が神に代わって自分で勝手に善悪を判断をし、自分の意のままに生きることを意味したのです。だから人がその木の実を取って食べた時、神は「人は我々のひとりのようになり、善悪を知るようになった」と言われたのです(3:22)。

◎人は最初から人格者として他の人格者と交わって生きるように造られていた。人には特に彼にふさわしい—彼と向かい合い、彼と対をなす—助け手が必要であった(18)。そのため女性が特別に人(アダム)の分身として造られた(21—23)。この神の創造のみわざに基づいて人が男と女に造られた時から、結婚の制度が存続するのです(24,マタイ19:4—6,マルコ10:6—9,エペソ5:31)。最初の人アダムにとっては、女性は骨肉の最上級、「骨からの骨」「肉からの肉」であり、文字通り一心同体であった。肉体的にも精神的にも被造物の間では最も近い関係にある。この神の普遍の御旨であるにも関わらず、離婚の問題は現実にあったのです。

◎ヨハネ黙示録 4 章以下にはこれから起こる事が記され、4 章は、ヨハネが見た天における御座についての記事です。そこには開かれた門があり、そこに上ると、天に一つの御座があり、輝いた御方がおられ、また 24 の椅子があり、24 人の長老が座っていたのです。その長老達は白い衣を着て、金の冠りをかぶった聖徒達の代表です。御使い達が、御座についておられる方に「聖なるかな。聖なるかな。聖なるかな…」と栄光、誉れ感謝をささげるとき、長老達はその御方の前で、ひれ伏し、礼拝をし、自分の冠を投げ出し、「主よ。われらの神よ…」と褒め称えるのでした。